

経済・金融 フラッシュ

【東南アジア経済】

ASEANの消費者物価(10月号) ～原油安による物価下押し圧力が弱まり上昇

経済研究部 研究員 齊藤 誠

TEL:03-3512-1780 E-mail: msaitou@nli-research.co.jp

ASEAN主要6カ国の9月の消費者物価指数(以下、CPI)の伸び率(前年同月比)は、総じて上昇した(図表1)。

昨年後半から原油安による物価下押し要因が一巡しているほか、干ばつの影響の和らぎによる食品価格の鈍化傾向が収まりつつあることも物価上昇に繋がった。もっとも景気は伸び悩んでおり、物価の上昇ペースはごく緩やかなものとなっている。

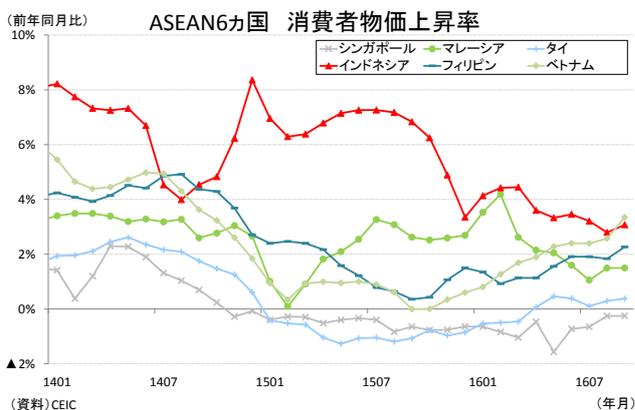
インドネシアの16年9月のCPI上昇率は前年同月比3.07%増(前月:同2.79%増)と上昇した(図表2)。レバラン(断食明け大祭)後に低下した購買意欲がやや持ち直すなか、食品が全体を押し上げた。

主要品目別に見ると、食材が同6.20%増(前月:同5.14%増)、住宅・電気・ガス・燃料が同1.64%増(前月:同1.55%増)と、それぞれ上昇した。また運輸・通信・金融は同1.25%減(前月:同1.93%減)とマイナス幅が縮小した。一方、衣類が同3.98%増(前月:4.71%増)と低下した。加工食品・飲料・タバコが同5.83%増(前月:同5.88%増)と、概ね横ばいの推移となった。

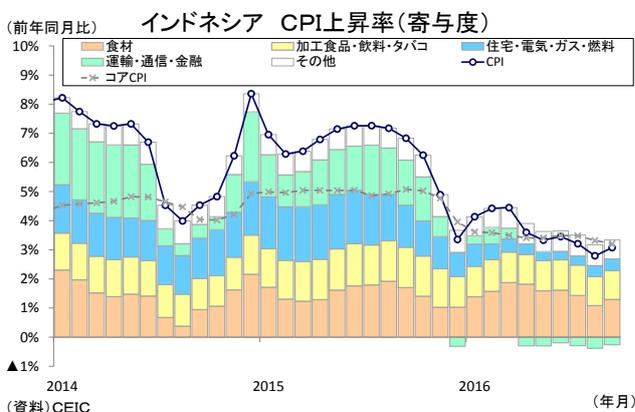
食料品とエネルギーを除いたコアCPI上昇率は同3.21%増(前月:同3.32%増)と、年明け以降は安定して推移している。

10月19～20日に開かれた中央銀行の金融政策会合では、足元の景気の伸び悩みやインフレ圧力の後退、さらには経常収支の改善やルピア相場の安定などを背景に政策金利を2ヵ月連続で0.25%引き下げて4.75%とした。なお、中央銀行はインフレ率が年末まで目標(3-5%)の下限近くで推移すると予想している。

(図表1)



(図表2)



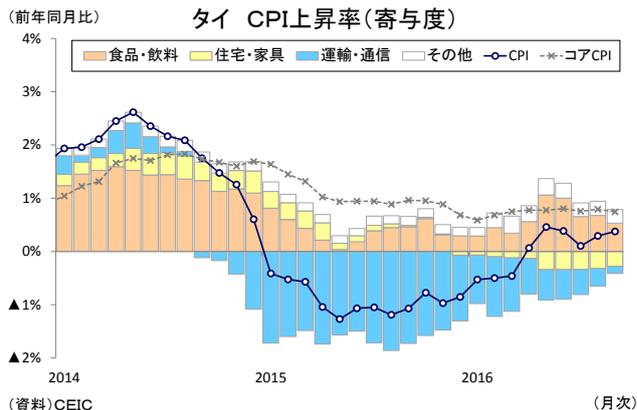
タイの16年9月のCPI上昇率は前年同月比0.38%増（前月：同0.29%増）となり、2ヵ月連続で上昇した（図表3）。

主要品目別に見ると、原油価格下落の一巡により、運輸・通信が同0.57%減（前月：同1.44%減）と上昇したほか、住宅・家具も同1.16%減（前月：1.32%減）と上昇した。またタバコ・酒類は同13.00%増と2月のタバコの物品税引き上げを受けて二桁増が続いている。一方、食品・飲料は同1.47%増（前月：同1.88%増）と干ばつの影響が和らいで低下した。

なお、9月のコアCPI上昇率（生鮮食品とエネルギー除く）は同0.75%増（前月：同0.79%増）と2ヵ月ぶりに小幅に低下し、概ね1%を下回る水準で安定している。

CPI上昇率は依然としてタイ銀行（中央銀行）のインフレ目標の範囲内（1-4%）を下回る低水準に止まっているが、中央銀行はインフレ率が16年後半に目標圏内まで上昇すると予想している。これまで景気はごく緩やかな回復基調が続いたが、パーツ高によって輸出の回復が遅れ、さらに足元ではプミポン国王の死去による服喪期間で民間消費が一時的に落ち込む可能性が高まっている。11月9日の金融政策委員会（MPC）では、中央銀行は今後の金融政策余地を確保する観点から政策金利を据え置くものと予想するが、政府が現在検討中の景気対策と足並みを揃えて金融緩和に踏み切る可能性もあるだろう。

（図表 3）

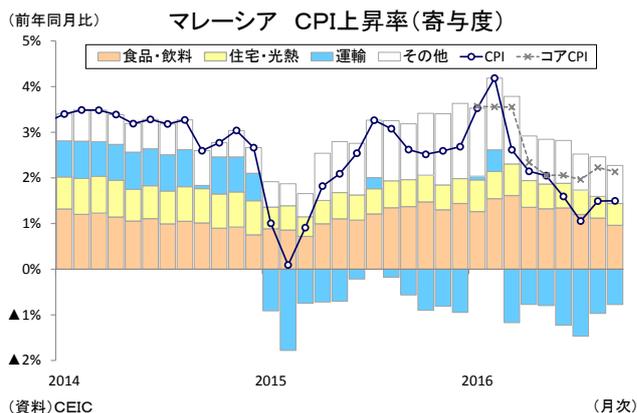


マレーシアの16年9月のCPI上昇率は前年同月比1.5%増と、前月の同1.5%増から横ばいとなった（図表4）。CPI上昇率は、3～7月にかけて景気の低迷と昨年4月のGST（物品・サービス税）導入による物価押し上げ効果の剥落を受けて低下し、その後の8-9月も低水準で推移している。

主要品目別に見ると、食品・飲料は同3.0%増（前月：同3.5%増）と生産の改善によって低下した。食品・飲料の内訳を見ると、肉類（同4.2%増）や海産食品（同4.8%増）、野菜（同1.6%増）、果物（同3.3%増）が前月に続いて低下した。運輸は同5.5%減（前月：同6.7%減）と、ガソリン価格の値下げを背景に減少しているものの、マイナス幅の縮小は2ヵ月連続となった。また娯楽・文化は同3.4%増と、前月の衛星テレビの料金引き上げを受けて高めで推移した。このほか、酒類・タバコは同19.7%増と、昨年11月のタバコ税と今年3月の酒税の見直しによって高水準が続き、住宅・光熱は同2.1%増（前月：同2.1%増）と横ばいとなった。

食品とエネルギーを除いたコアCPI上昇率は同2.1%増（前月：同2.2%増）と、小幅に低下した。

（図表 4）



中央銀行は16年のインフレ予想を前年比2.0~3.0%増としており、先行きの物価の上昇圧力は弱い状況が続くとしている。

シンガポールの16年9月のCPI上昇率は前年同月比0.2%減と、前月（同0.3%減）から小幅に上昇した（図表5）。

主要品目別に見ると、運輸は同0.5%減（前月：同0.7%減）と、ガソリン価格の下落幅の縮小によって4ヵ月連続で上昇したほか、食品も同2.2%増（前月：同2.0%増）と、パン・シリアルや肉類を中心に小幅に上昇した。一方、サービス価格は同1.5%増（前月：同1.7%増）と、バス・鉄道料金の上昇が一時的¹だったことから低下した。このほか住宅・光熱費は同4.3%減（前月：同4.3%減）と、住宅価格と電気・ガス料金のマイナス傾向が続いた。

自動車と住宅を除いたMAS（シンガポール金融管理局）のコアCPI上昇率は同0.9%増（前月：同1.0%増）となり、サービス価格の低下が食品価格の上昇を相殺して横ばいとなった。

MASはインフレ予想を2016年が平均▲0.5%と低水準に止まり、2017年が0.5%~1.5%まで緩やかに上昇すると予測している。

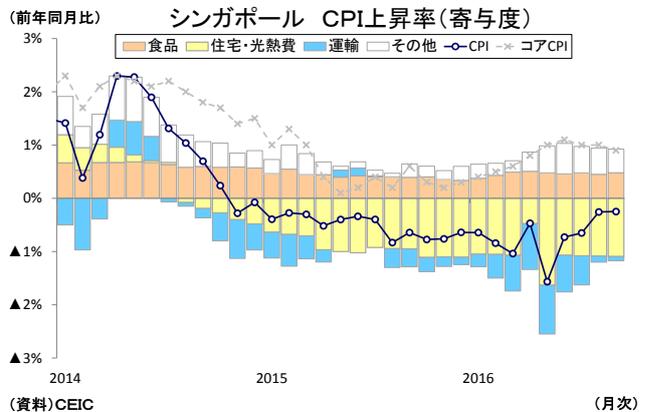
フィリピンの16年9月のCPI上昇率は前年同月比2.3%増と、電気・ガス料金に加えて食品価格も押し上げ要因となって前月（同1.8%増）から上昇した（図表6）。

主要品目別に見ると、全体の4割を占める食品・飲料（酒類除く）が同3.1%増（前月：同2.4%増）と、悪天候の影響で農産物の生産が落ち込み、コメ・野菜・果物を中心に上昇した。また住宅・水・電気・ガス・燃料は同0.9%増（前月：同0.2%減）と、電気およびガス料金を中心に上昇し、2ヵ月連続のプラスとなった。一方、運輸は同0.2%増と引き続き低水準で推移した。

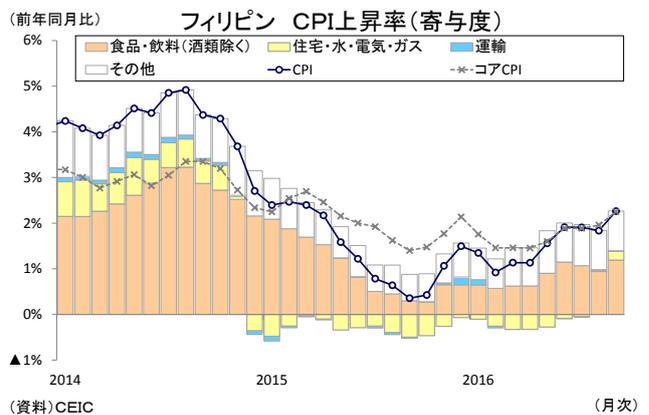
食品とエネルギーの一部を除いたコアCPI上昇率は同2.3%増と、前月の同2.0%から上昇した。

インフレ率は昨年後半から上昇基調にあり、17ヵ月ぶりに中央銀行のインフレ目標圏内（2~4%）に達した。中央銀行は16年のインフレ予想が目標を僅かに下回るが、17-18年は目標圏内半ばまで上昇すると予測している。

（図表 5）



（図表 6）



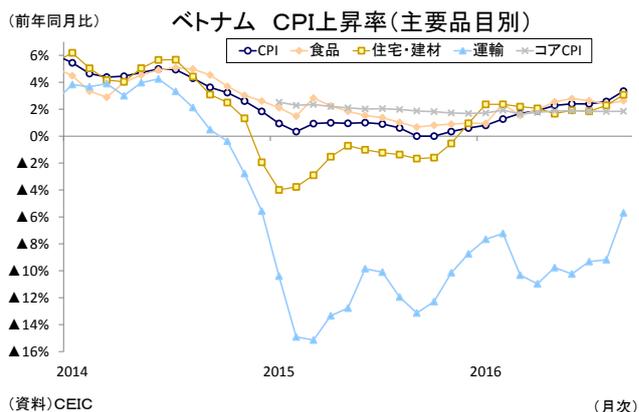
¹ 前月（8月）の公共交通コストは、前年がシンガポール独立50周年につきナショナルデー（8月9日）のMRTとバスの運賃が無料であったことから5ヵ月ぶりの上昇に転じた。

ベトナムの16年9月のCPI上昇率は前年同月比3.3%増と、前月の同2.6%増から上昇した(図表7)。CPI上昇率は依然として政府目標の5%を大きく下回る水準で推移しているものの、昨年後半に底打ちして以降、緩やかな上昇基調にあり、約2年ぶりの3%台に達した。

主要品目別に見ると、新学年が始まった教育が10.3%増(前月:同4.2%増)と、上昇した。また食品が同2.6%増(前月:同2.4%増)、住宅・建材が同3.1%増(前月:同2.3%増)と、それぞれ上昇した。さらに運輸も同5.7%減(前月:同9.2%減)とガソリン価格の値上げを受けて上昇した。このほか、保健・ヘルスケアは同33.4%増と、3月と8月の医療費の引上げを受けて高水準で推移した。

また食料品とエネルギー、政府の価格統制品目(医療・教育)を除いたコアCPI上昇率は同1.9%増(前月:同1.8%増)となり、年明けから概ね横ばい圏の推移が続いている。

(図表7)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。